

日本18世紀学会第39回全国大会

プログラム

報告要旨

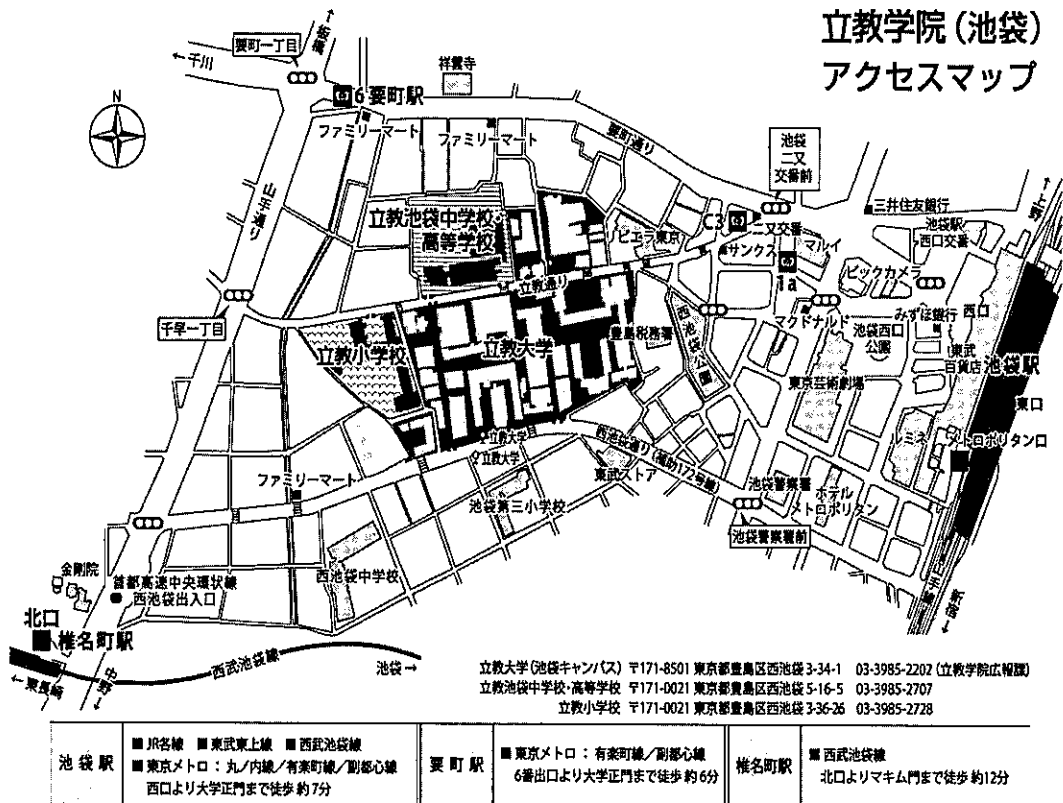
2017年6月24日（土）、25日（日）

立教大学（池袋キャンパス）

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

第39回大会プログラム

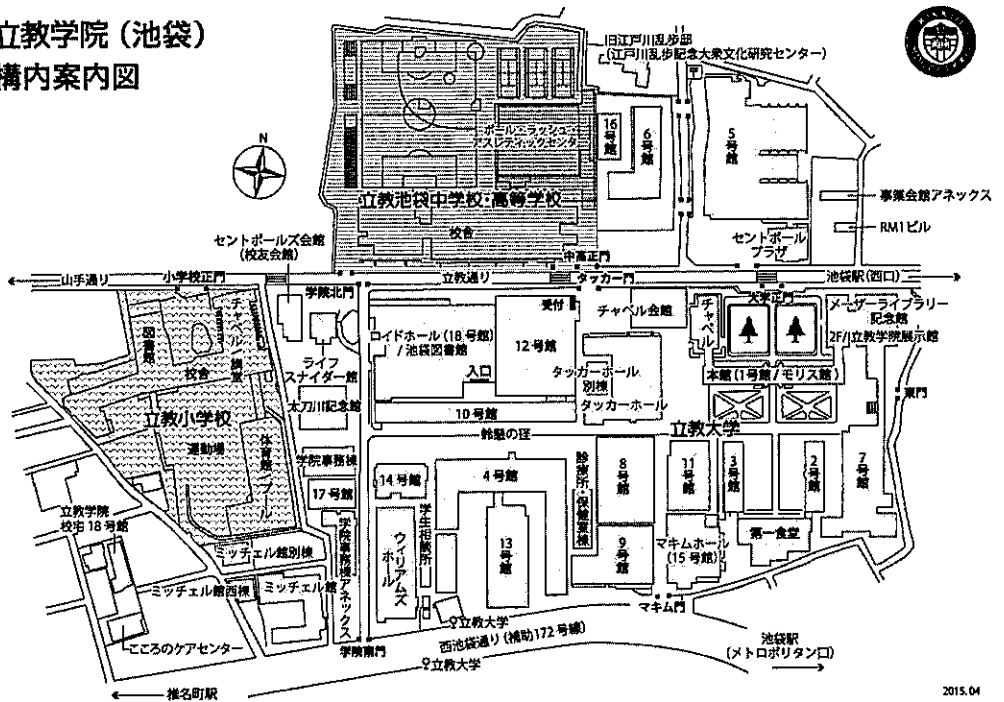
〈立教大学池袋キャンパスへのアクセス〉



2015.04

立教大学 池袋キャンパスマップ

立教学院（池袋） 構内案内図



- 発表会場 太刀川記念館 3階 多目的ホール + 1階 第一第二会議室
- 参加者控室 太刀川記念館 1階 第一第二会議室
- 幹事会 ロイドホール（18号館）5階 第一会議室
- 事務局控室 太刀川記念館 3階
- レクチャーコンサート会場 チャペルおよびチャペル会館
- 懇親会会場 第一食堂

第1日 6月24日(土)

発表会場 太刀川記念館

9:20 受け付け開始

9:50 - 10:00 開会挨拶 3階 多目的ホール

立教大学総長 吉岡知哉

自由論題報告

10:10-11:00

自由論題報告(1) 3階 多目的ホール

「ルソーの自己表象における〈真実〉と〈語り手〉の問題」

安田 百合絵(東京大学大学院)

司会:井上 櫻子(慶應義塾大学)

自由論題報告(2) 1階 第一第二会議室

「アムステルダムにおけるリュリのオペラ受容—楽譜出版者エティエンヌ・ロジェ
(1665/66-1722)による『組曲版』を中心に」

七條 めぐみ(愛知県立芸術大学)

司会:小穴 晶子(多摩美術大学)

11:10-12:00

自由論題報告(3) 3階 多目的ホール

「ジュネーヴ共和国における18世紀中葉の動乱とルソー受容」

橋詰 かすみ(一橋大学大学院)

司会:坂倉 裕治(早稲田大学)

自由論題報告(4) 1階 第一第二会議室

「A. G. バウムガルテンの遺稿『哲学的百科事典の素描』と『一般哲学』における美学の構
想」

井奥 陽子(東京藝術大学大学院)

司会:桑原 俊介(上智大学)

12:00-13:30

昼食(+幹事会)

13:30-14:20

自由論題報告 (5) 3階 多目的ホール

「君主主義と共和主義—ケンブリッジ学派の諸研究にみる人文主義的統治術とスコットランド啓蒙」

上野 大樹 (日本学術振興会)

司会：寿里 竜 (慶應義塾大学)

自由論題報告 (6) 1階 第一第二会議室

「18世紀フランスの雅宴画 (フェット・ギャラント) にみられるリボンの表象—ギャラントリーの系譜」

内村 理奈 (日本女子大学)

司会：川島 慶子 (名古屋工業大学)

14:40-17:20

共通論題 1 「コスモポリタニズムの歴史的文脈」 3階 多目的ホール

コーディネーター：大石 和欣 (東京大学)

14:40-15:00

趣旨説明

大石 和欣 (東京大学)

15:00-15:30

第1報告「18世紀西欧における国際関係の動揺と『コスモポリタニズム』 フランスからの視角」

王寺 賢太 (京都大学)

15:30-16:00

第2報告『啓蒙のドイツ』におけるコスモポリタニズム論—世界市民像とその限界」

弓削 尚子 (早稲田大学)

16:00-16:10

休憩

16:10-16:40

第3報告「市民フランクリンのコスモポリタニズム：共和主義、パトリ、世界市民」

金井 光太郎 (東京外国語大学)

16:40-17:00

総評

勝田 俊輔 (東京大学)

17:00-17:20

質疑応答

17:20-18:00

休憩

18:00-19:00

レクチャーコンサート チャペル (立教学院諸聖徒礼拝堂)

「18世紀のオルガン音楽」

崎山 裕子 (立教学院オルガニスト)

第1部 英国・ティッケル社のオルガンによる演奏

・18世紀、英国の音楽

John Stanley (1713-1786)

Voluntary No. 8 in D Minor, Op. 5

William Walond (1725-1770)

Cornet Voluntary in G major

・18世紀、ドイツの音楽

George Frideric Handel (1685-1759)

Alla Hornpipe from 'Water Music Suite No. 2 in D Major, HWV 349-2'

Johann Sebastian Bach (1685-1750)

Werde Munter BWV 147

Tocatta in d BWV 565

(第1部終了後、隣接のチャペル会館2階マグノリア・ルームへ移動)

第2部 ドイツ・ベッケラート/マナ社のオルガンによる演奏

・J. S. Bach について

Johann Sebastian Bach (1685-1750)

Tocatta con Fuga in d BWV 565

Allein Gott in der Hoer sei Ehr BWV 662

Praeludium et Fuga in h BWV 544

演奏者紹介

崎山 裕子（さきやま ゆうこ）

国立音楽大学器楽科ピアノ専攻を卒業後、オルガンに転向。東京・東久留米市にある聖グレゴリオの家宗教音楽研究所の本科（3年）を修了後、スイス・バーゼル市立バーゼル音楽院オルガン科コンサートクラスに留学し、ギ・ボヴェに師事。1997年、コンサートディプロマを最優等で取得し、修了。米・ボストンのニューイングランド音楽院に短期留学した後、1998年に帰国。

立教池袋中学校・高等学校オルガニスト、立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊非常勤聖歌隊長を経て、2003年、立教学院オルガニストに就任。学院の式典や礼拝での奏楽、諸聖徒礼拝堂聖歌隊の伴奏のほか、立教大学オーガニスト・ギルドに所属する約30名の学生を指導し、大学で行われる日々の礼拝の奏楽奉仕者を育成している。立教大学大学院キリスト教学研究科ウィリアムズコース兼任講師、立教大学教会音楽研究所所員。

19:10-21:00

懇親会 第一食堂（東京都選定歴史的建造物）

第2日 6月25日(日)

発表会場 太刀川記念館

10:00-10:50

自由論題報告(7) 3階 多目的ホール

「1707年イングランド・スコットランド合同(英蘇合同)と18世紀スコットランド政治」

松園 伸(早稲田大学)

司会:坂下 史(東京女子大学)

11:00-11:50

自由論題報告(8) 3階 多目的ホール

「18世紀フランス市民劇と「憐みの政治」—ルイ=セバスチアン・メルシエ『貧乏人』における貧困の表象」

貝原 伴寛(東京大学大学院)

司会:川村 文重(慶應義塾大学)

自由論題報告(9) 1階 第一第二会議室

「クニッゲとその娘フィリップーネー啓蒙後期の父による女子教育の一例」

吉村 暁子(立教大学大学院)

司会:笠原 賢介(法政大学)

12:00-13:00

昼食および総会

13:00-16:50

共通論題 2「世界の複数性」 3階 多目的ホール

コーディネーター:坂本 貴志(立教大学)

13:00-13:10

趣旨説明

坂本 貴志(立教大学)

13:10-13:40

第1報告「複数世界論の普遍性、多様性と18世紀における機能」

長尾 伸一(名古屋大学)

13:40-14:10

第2報告「18世紀フランスにおける表象理論の刷新と複数性」

玉田 敦子（中部大学）

14:10-14:40

第3報告「世界の複数性と永遠の哲学—ゴットシェートと山片蟠桃」

坂本 貴志（立教大学）

14:40-14:50

休憩

14:50-15:20

第4報告「18世紀中国における天文学的複数世界論の不在—朝鮮知識人に対する応答の記録を手掛かりに」

林 文孝（立教大学）

15:20-15:50

第5報告「日本における異界・他界表現と複数世界論—断続・杜絶・再生」

鈴木 彰（立教大学）

15:50-16:10

コーヒー・ブレイク（質問書回収）

16:10-16:50

質疑応答および一般討論

16:50-16:55

閉会挨拶



*大会参加費として**500円**（ただし学生は**無料**）、非会員の方は**1,000円**をいただいております。ご了承ください。

*お弁当をご希望の方は出欠はがきにてお申し込みください。

大学周辺には飲食店、コンビニエンスストア等ございますが、当日は混雑が予想されますので、お弁当をご用意いたします。日曜日は、お昼休みに総会がありますので、出席を予定されている方はお弁当をお申し込みください。

お弁当代：1,000円（税込）お茶付き

*大会参加の際、保育所、ベビーシッターを利用される場合は、学会にて保育費の半額を負担いたします。ご希望の方は、学会終了後領収書を事務局までお送りください。後日学会負担分をお振込みいたします。なお、大会開催場所には、諸般の事情により、託児所を設置いたしません。紹介斡旋もいたしかねますので、この点ご了承くださいませよう、お願い申し上げます。

*大会への出欠は同封の葉書で5月26日（金）までにお知らせください。

第1日 6月24日

自由論題報告(1)

会場：立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館3階 多目的ホール

ルソーの自己表象における〈真実〉と〈語り手〉の問題

安田 百合絵（東京大学大学院）

自伝作品『告白 (*Les Confessions*)』において、ジャン=ジャック・ルソーは一貫して「自己の真実」を語ることにこだわりを見せている。その冒頭には「わたしは自分の同胞に、ひとりの人間を自然のあらゆる真実において示したい。そしてその人間とは、わたしのことである」という宣言が掲げられ、第二部最終巻の末尾でも、ルソーは「わたしは真実を語った」と断言することになる。

ところで、ここで言われている「真実 (*la vérité*)」とはいったい何を指しているのだろうか。無論、それはありのままの自己を読者や聞き手としての他者に示すということに関わっており、自分に捉えうる限りでの自己の姿がここで言われるところの「真実」であると一旦は解することができる。しかし、自己像とは自明に在る実体ではなく、語られることによって初めて成立するものであり、また語られる自己と語る自己が同一であるがゆえの、複雑な二重化を被るものでもある。『告白』のヌーシャテル草稿が示すように、ルソー自身もそのことをよく意識していた。そうであるとき、自己の「真実」はきわめて複雑な概念になりうる。

本発表では、「マルゼルブ氏への手紙 (*Lettres à M. De Malesherbes*)」から『孤独な散歩者の夢想 (*Rêveries du promeneur solitaire*)』にいたる、いわゆるルソーの自伝的テキストにおける「真実」の概念、およびその表出にあたっての語り手の役割を分析することで、ルソーの自己表出の概念の複雑なありようとその変遷を描き出すことを試みたい。真実という問題については、とりわけ「陰謀」への意識の変化にともなって、『対話』をピークとする真実を伝達せんとする意志の高まりと、『夢想』におけるその沈静化が見られることになるが、語り手の問題については、作品ごとに彼がその戦略を変化させ、読者と様々な関係を取り結ぼうとする、その遷移について丁寧に検討することにしたい。発表においては、ルソーの自伝以外の作品や、ディドロのコント作品に登場する捉えがたい語り手の立場などをも踏まえ、また、『ルソーにおける自己のイメージ (*Les Images de soi chez Rousseau*)』(越森彦)等の先行研究にも目配りすることで、自伝研究という枠にとどまらずに論じることをめざしたい。

自由論題報告 (2)

会場：立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館 1階 第一第二会議室

アムステルダムにおけるリュリのオペラ受容 —楽譜出版者エティエンヌ・ロジェ (1665/66-1722) による 「組曲版」を中心に—

七條 めぐみ (愛知県立芸術大学)

本発表は、2017年1月に愛知県立芸術大学およびパリ＝ソルボンヌ大学によって審査された博士学位論文に基づくものである。

ジャン＝バティスト・リュリ (1632-1687) のオペラは、絶対王政期のフランス音楽を代表するものとして、17世紀末後半から18世紀前半のヨーロッパで高い知名度を誇った。中でもオランダは、フランスに次いでリュリのオペラ受容が進んだ地域である。アムステルダムやハーグの劇場では1680年代から1710年代にかけて、リュリのオペラがフランス語だけでなくオランダ語でも上演された。また、アムステルダムでは1740年代に至るまで、オペラのコアや編曲版が出版され続けた。このような諸相の中でも、器楽用に編曲された「演奏用エール *airs à jouer*」の出版はオランダ独特の現象である。これは、フランス風序曲を冒頭に置き、舞曲をまとめた組曲の形を取ることから「組曲版」と呼ばれ、フランス・オペラとドイツの管弦楽組曲をつなぐものとして認識されてきた。しかし、作曲家ではなく出版者によるオペラの加工という側面は、十分に考察されてきたとは言いがたい。

本発表ではこの問題を扱う切り口として、アムステルダムの出版者エティエンヌ・ロジェ (1665/66-1722) に焦点を当てる。ロジェはノルマンディー地方のカンに生まれ、1695年から1722年までに600点近くの楽譜や音楽理論書を出版した人物である。ロジェの活動の中では、イタリアの器楽作品の出版と国際的な楽譜販売が評価の対象となってきた。一方で、ロジェがフランスのプロテスタント教徒 (ユグノー) であり、彼の楽譜出版の約3分の1をフランス音楽が占めていたことは、あまり知られていない。そればかりか、ロジェによるフランス音楽出版は、パリの初版譜を無断で再版した「海賊版」であるとして、見向きもされなかったのである。上述の組曲版に関しては、それがロジェの出版物全体の中でどのような意味を持つのか、また編曲を通じてどのような音楽的变化が生じたのか、詳細に検討する余地がある。

したがって本発表では、リュリのオペラの組曲版の特徴を、ロジェの生い立ちと活動、カタログを活用した楽譜販売、出版者による音楽の加工に注目しながら考察し、歴史的、文献学的、音楽史的な観点からの位置づけを行う。

自由論題報告 (3)

会場：立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館3階 多目的ホール

ジュネーヴ共和国における18世紀中葉の動乱とルソー受容

橋詰 かすみ (一橋大学大学院)

18世紀中葉のジュネーヴ共和国において、ジャン＝ジャック・ルソーの二著作『エミール』『社会契約論』に対する当局の焚書処分(1762年6月)は、主権を巡る政治的対立を顕在化させることとなった。本報告は、この「ルソー事件」を契機とするジュネーヴの政治動乱に着目し、その中でルソーがどのように表象されたのかを明らかにすることを目的とする。

1762年のジュネーヴは表面的には平穏だったが、動乱が起こる素地は既に形成されていた。というのも、直接民主制の原則によって運営されるはずの市民総会は17世紀末から形骸化し、名門出身の市民によって占められた小評議会(参事会)が寡頭政を敷いていた。そして本来、主権者であるにもかかわらず、実質的な政治参加の機会を奪われた市民たちの不満は溜まり、度々、政治衝突や内乱が起きていたのである。18世紀中葉においても問題は解決しておらず、「ルソー事件」は結果的に新たな政治動乱が始まる引き金となった。当局が焚書の決定を下した一年後、反体制派の市民たちはこの処分に反対するための意見書を政府に提出するが、政府はこれに対して拒絶の姿勢を貫き、対立はさらに深まっていく。最終的には反体制派市民が官職選挙を放棄することによって政府機能が停止する事態に至り、1768年にチューリッヒとベルン、フランスの調停によって騒動が鎮圧されることになる。

このような状況の中、ジュネーヴ人の政治言説においてルソーはどのように利用され、表象されたのか。この時期にはルソー自身、さらにはヴォルテールがジュネーヴに介入してくるが、本報告では彼らの言動ではなく、ジュネーヴ人活動家によるルソーへの言及に着目する。さらにその後のジュネーヴ史の展開も視野に入れつつ、政治的刊行物を分析することによって、この問いを明らかにしたい。

自由論題報告 (4)

会場：立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館 1階 第一第二会議室

A. G. バウムガルテンの遺稿『哲学的百科事典の素描』と『一般哲学』における美学の構想

井奥 陽子 (東京藝術大学大学院)

バウムガルテン (1714-62 年) は哲学的学科としての美学の創始者であるが、彼は自らの美学思想を十分なかたちではテキストに残さなかった。「美学」という語を初めて用いた学位論文『詩に関する諸点についての哲学的省察』(35 年、以下『省察』) では、終盤でその新たな学の定義と必要性を述べるに留まる。唯一この学科名を冠した『美学』(50/58 年) は、計画の 6 分の 1 にも満たずに中断された。『美学』第 1 巻に則した『美学講義録』(50 年頃採録) を併せても、バウムガルテンが思い描いていた美学の全体像は見えてこない。そればかりか、美学の確立にもっとも精力的であったと思われる、40 年前後の思想を窺い知ることができない。

従来はこうしたテキストの不足を、おもに『形而上学』(初版 39 年、第 4 版 57 年) の経験的心理学の章や、弟子のマイヤー (1718-77 年) の著作によって補ってきた。しかし異なる分野や論者のテキストからの読解には、当然ながら限界がある。

そこで本発表は、哲学体系を描いた『哲学的百科事典の素描』(39-40 年頃執筆、69 年公刊、以下『素描』) と哲学の入門的な内容を著した『一般哲学』(42 年頃執筆、70 年公刊) に注目する。これらのテキストには、バウムガルテンが 40 年前後に構想した美学の体系が記されているからである。両者ともに遺稿であるうえ、美学に関してはその下位部門がただ羅列されることから、先行研究では言及されたとしても概略が触れられるのみであった。対して本発表は、これらの著作で述べられる美学体系を細分類に亘るまで再構成することで、バウムガルテンが構想した美学のもっとも広い外延を示す。さらに『省察』と『美学』をそれらの体系のうちに位置づけることで、バウムガルテン美学の特徴をとりだすことを目指す。

本発表の考察をとおして、バウムガルテンが占星術や説教術といった既存の技術を美学に包摂し、各々を認識能力に応じて分類しようと試みていたこと、そしてなかでも記号を解釈ないし表示する部門に強い関心を抱いていたことが明らかになるだろう。詩学・修辞学の性格が強い『省察』と『美学』は、おもに『素描』の叙述 (proponere) 部門と『一般哲学』の陳述 (propositio) 部門が具体化したものとみなしうる。事実上これらの部門を「感性的認識の学」としての美学の基礎に据えたことから、美における認識の在り方を個々の言語表現をとおして捉えようとするバウムガルテンの姿勢を読みとることができるであろう。

自由論題報告 (5)

会場：立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館 3階 多目的ホール

君主主義と共和主義

—ケンブリッジ学派の諸研究にみる人文主義的統治術とスコットランド啓蒙—

上野 大樹（日本学術振興会）

政治思想史の文脈では、ルネサンス以来の人文主義の潮流はそれがもつ共和主義的な性格に注目して理解されてきた。その背景に、ハンス・バロンの著作から採用されたポーコックのシヴィックな人文主義への着目と、「マキアヴェリアン・モーメント」としての近世ヨーロッパ政治思想の歴史叙述があることは、周知のところである。もちろん、初期近代の政治思想が共和主義としての公民的人文主義へと還元されてしまうわけではない。それどころか、イタリア戦争を一つのメルクマールとして、都市国家にたいして君主国家が優位を獲得していくプロセスに、初期近代の基本的な趨勢を見定める見方もなお有力である。すなわち、文化的には隆盛をきわめていた都市国家は、しかし政治的には北方の君主制領域国家にしだいに圧倒されるようになり、常備軍と官僚制をそなえ近代国家の原型を提供したアルプス以北の君主国がやがてヨーロッパ政治の主役に躍り出た、というストーリーである。問題はむしろ、君主政と共和政という近世ヨーロッパの基本的な対立図式のなかで、キリスト教文献よりも古典古代のポリス世界に範を求める人文主義の運動が、もっぱら後者の共和政体の思想的支持基盤として位置づけられてきたという点にある。共和派が、古代ローマやギリシアの人文主義文献の歴史叙述に影響をうけたのはみやすい事実であろう。だがそれに対して君主政支持者は、もっぱらキリスト教にかかわる言説資源に依拠して政体の正統化をはかったととらえられる傾向にあった。聖書の記述を典拠とした聖なる歴史にもとづく、王権神授説や絶対的家父長権論などである。しかし本報告では、君主政体の枠内に吸収された人文主義も、その内部で決して無視することのできない足跡を残したと論じる。ルネサンス人文主義は、共和主義として君主政批判の論拠を提供しただけでなく、宮廷顧問官に受容されて君主主義の新しい形態を準備するのにも大きく寄与したと考えられるからである。そして、18世紀の思潮を代表するスコットランド啓蒙の政治経済学は、従来検討されてきた共和主義との関係以上に、君主政を前提とした人文主義的統治論との系譜関係に注目することでよりよく理解されると主張する。特にヒュームの「文明化された君主政」論、およびアダム・スミスの「体系の精神」批判をとりあげ、それらが宮廷人文主義の伝統のなかに重要な思想的起源をもっていることを指摘したい。

自由論題報告 (6)

会場：立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館 1階 第一第二会議室

18世紀フランスの雅宴画（フェット・ギャラント）にみられるリボンの表象 —ギャラントリーの系譜—

内村 理奈（日本女子大学）

18世紀のロココ美術を代表する雅宴画には、いわゆる「愛の園」に見立てられた森の木陰や庭園などでの恋人たちの情景が描かれている。これらはおそらくフランス貴族たちの心象風景としての、ひとつの愛の理想の世界であったものと考えられる。このような雅宴画の情景の中に、数は多くはないが、男性がリボンを身に着けて描かれることがある。あるいは女性からリボンを渡されている場面も見受けられる。これらは些細な何気ないひとこまであるが、18世紀フランスの男性服にリボンを用いることがほとんどないことを知るものにとっては目が引かれる。

17世紀フランスの男性服においては、リボンの大流行が一時期見られた。このリボンの大流行は、現代人のわれわれの常識からすると奇異なものに映るがゆえに、服飾史家の間ではよく知られている。そして、それらが同時代に固有の美意識である *galanterie* の表現のために不可欠なものであり、それゆえにギャランという呼称をもったことも、すでに知られている。このギャランと呼ばれるリボンは、17世紀後半でのリボン装飾と考えられてきたが、実際には1630年代から1640年代にかけてのものであり、男女の恋愛感情とともに、恋人同士の間で贈り合い、身に着けられていたものであることがほぼ特定できている。18世紀の雅宴画のリボンは、これらのリボンとなんらかの関わりがあるのだろうか。

いっぽう、ギャラントリーについては、それが流行現象であるがゆえに定義しにくい事象であるとされてきたが、近年になって、いくつかの先行研究を認めることができる。ギャラントリーとは、もともと多義的な言葉であるが、多くの仏和辞書は、「(女性に対する) 慇懃さ、親切さ」「(女性に言う) 甘い言葉」などと説明する。先行研究も、多くの場合、ヨーロッパ中世に端を発する宮廷風恋愛を基盤とした貴族社会における男女の恋愛模様について、文化史的視点から考察されているものが多い。つまりギャラントリー研究は、とりわけフランスに固有の宮廷や社交界を中心に展開された男女間の愛の文化史という形で論じられてきた。雅宴画の研究にもすでに多くの蓄積が存在するが、画中のリボンに着目して、その表象について論考されたものはほとんど見当たらないといつてよい。

本発表では、18世紀の雅宴画において、なぜ男性のものとしてリボンが時折描かれることがあったのかを、リボンの表象の史的経緯を追いながら分析し、明らかにしたい。扱う史料はジャン・フランソワ・ド・トロワやニコラ・ランクレの雅宴画をはじめとする図像資料を中心に、17世紀後期の文学作品ラファイエット夫人の『クレヴの奥方』なども参照し、ジャン・ジャック・ルソーの「盗まれたリボン」の問題にも触れながら、ギャラントリーをめぐるフランスにおける精神史の一端を、リボンの表象の中に読み解きたい。

コスモポリタニズムの歴史的文脈

コーディネーター：大石 和欣（東京大学）

趣旨説明

コスモポリタニズムについての研究が盛んになっている近年であるが、その要因の一つにグローバル化の拡大と混乱がある。経済の領域において、国境を超えた人間と物資の流動性が高まり、文化の相互浸透が促進される一方で、それに対する不満や軋轢も蓄積されてきた。ヨーロッパにおける移民・難民問題が過熱したところで起きたイギリス国民投票によるEU離脱決定、アメリカ合衆国においてメキシコ国境の壁を設けると宣言して誕生したトランプ政権誕生は、現代的な視点からのコスモポリタニズムに関わる問題を提示しているように思われる。

もちろん、18世紀研究の立場から、こうした現代の問題をそのまま持ち込んで考えるのは錯誤を犯すことになる。表面的で画一的なグローバリズムという21世紀的な概念は、18世紀の啓蒙主義が提示した世界市民、人類愛の理念とは異質なものであるし、現代の移民・難民問題は、カントが『永久平和のために』で提示した自由な諸国家の連合というヴィジョンや外国人の「訪問の権利」を想起しつつも、両者を重ね合わせてしまうことでそれぞれの問題の本質は見えなくなってしまう。しかしながら、現在の問題が18世紀における「世界市民」、コスモポリタニズムをめぐる錯綜した文脈を照射してくれることもたしかである。この共通論題においては、18世紀において展開したコスモポリタニズムという概念を、北米およびヨーロッパを軸にした歴史的な文脈のなかで再検討をする試みである。

「世界市民 (κοσμοπολίτης)」の理念は、シノペのディオゲネスが特定のポリスに属さないものとして自らを呼称した際に用いたとされるが、ロゴスの普遍性に従う自然法を重んじるストア派によって、理性的な人類を包括する政体というヴィジョンへと展開されていく。より複雑かつ広範囲に国家権力、政治、商業、思想が絡み合う18世紀の文脈のなかでは、一元的に議論できない概念として再構築、再定義がはかられていく。

ディオゲネスとストア派の「世界市民」の理念は、『百科全書』(1754年)における“cosmopolite”の項目において、所属する国を持たない異邦人に対する偽装的形容としての世界市民の意味と、フェヌロンが標榜したとされる「人類愛」の美德という意味とに並行して提示される。しかし、世界市民のヴィジョンは17世紀以降の商業・交易の発展によって促進されたことも事実である。1711年5月19日付の『スペクテイター』誌において、ジョゼフ・アディソンが、王立取引所を舞台に多様な国籍・民族の人びとが交渉し、ロンドンでは多種多様なものが売られているのを目の当たりにして歓喜し、「世界市民」である意識を高らかに誇示するのは、文化混淆を許容し、助長する商業の発展が背景にある。それは商業に基

づく平和を希求する新たなコスモポリタニズムの理念をつくり出すと同時に、他方で植民地を含む海外覇権の伸長をもくろむ「帝国」同士の対抗意識と抗争をもたらす要因ともなる。スペイン継承戦争、七年戦争、アメリカ革命戦争、フランス革命戦争と続くなかで、愛国主義と人類愛との両立の可能性というストア派以来の課題は、政治的な議論の核の一つとして展開していく。そうした歴史的文脈のなかで、外交や地政学的な問題も含めながら、ヨーロッパにおける18世紀のコスモポリタニズムの展開を位置づけてみたい。

(大石 和欣)

第1 報告

18 世紀西欧における国際関係の動揺と「コスモポリタニズム」 フランスからの視角

王寺 賢太（京都大学）

カント以後の思想史において、「コスモポリタニズム」は、普遍性を標榜する「啓蒙」の政治学を体現する概念としてたびたび取り上げられ、毀誉褒貶に晒されてきた。その際、批判者たちのある者は「コスモポリタニズム」が担う普遍性の抽象性を難じ、またある者はその普遍性の虚偽性、欺瞞性を指弾してきた。18 世紀フランスを中心に「コスモポリタニズムの歴史的文脈」を再検討するにあたって、私はこれらいずれの視点をも退けながら、むしろ「コスモポリタニズム」的な普遍主義が 18 世紀西欧のいかなる歴史的條件に根差しつつ、それを乗り越えようと試みるものであったかを強調することにしたい。

その際とりわけ注目すべきは、ルイー四世の治世末期からフランス革命勃発までの一世紀足らずのあいだに、フランスを含む西欧が経験した国際関係の動揺であろう。ルイー四世の世紀の終わりとともに、キリスト教圏における「普遍君主制」の夢がいったん潰えたあと、世紀前半の西欧の相対的平和は、西欧諸国とアジア・アフリカ・アメリカとの国際通商——そこには黒人奴隷貿易とカリブ海の農業植民地開拓も含まれる——の飛躍的發展をもたらした。しかしその商業の時代はまた、とりわけイギリスとフランスのあいだに世界を舞台とする利害対立を激化させ、七年戦争という名の世界戦争を惹起するものでもあったのである。この戦争で、圧倒的勝利を収めたイギリスは、アジア・アフリカ・アメリカにおける海運・商業・植民地におけるヘゲモニーを握るが、長年の戦争の余波で財政難を悪化させた英仏両国は、結果的に世紀末のアメリカとフランスにおける二つの「革命」を経験することになる。18 世紀末、世界規模に拡大した西欧諸主権国家間の軍事的・政治的・経済的關係は、当の西欧各国内の政治体制そのものに大きな変革をもたらさずにはいなかったのだ。

本発表では、この同時代の国際関係の変動に呼応しつつ、フランスにおいて「コスモポリタニズム」的言説がいかなる変容を見せるかを、世紀初頭のペール『歴史・批評辞典』の理想の歴史家像、世紀前半のムロン『商業についての政治的試論』、モンテスキュー『法の精神』に見られる「商業の精神」論、そして七年戦争後のレナル・ディドロ『両インド史』によるイギリスの「海の普遍君主制」批判に焦点を当てて瞥見しておきたい。それはまた、この地上のいかなる聖俗権力をも相対化する懐疑論に根差していた「コスモポリタニズム」が、いったん商業的ネットワークに内面化され、さらにその商業的ネットワークがもたらす紛争を乗り越えるための国際的・国内的な政治秩序の模索へと逢着する過程であった。

第2 報告

「啓蒙のドイツ」におけるコスモポリタニズム論 —世界市民像とその限界—

弓削 尚子（早稲田大学）

1797 年、ドイツのある啓蒙雑誌の一つに「コスモポリタニズムについて Ueber Cosmopolitismus」という論考が発表された。北ドイツ、オルデンブルクの文献学者は、その中で、コスモポリタニズムの訳語に「世界市民精神 Weltbürgergeist」という概念をあてている。そして「世界市民 Weltbürger」とは何かを論じるにあたって、「都市市民 Stadtbürger」や「公民 Staatsbürger」における「市民」概念を参照しつつ、世界という大きな結びつきに妥当性をもつ権利と義務に従って生きる人びと、すなわち「地球上の理性的な住民」と定義した。「啓蒙のヨーロッパ」は、多様な風習と価値観に生きる世界各地の諸民族に多大な関心を払ったが、「世界に暮らす住民」とは「世界市民」と同義ではない。「市民」としての資質が問題なのだ。

「世界市民 Weltbürger」というドイツ語の初出は 1701 年のことで、「人間の友 Menschenfreund」とも言い換えられたが、この言葉が後世に決定的な影響力を与えたのは、言うまでもなくイマヌエル・カントの「永遠平和のために」（1795 年）である。この論考は、普遍的な自然権思想に基づき、「われわれの大陸の文明化された諸国家、とくに商業を営む諸国家の非友好的な振る舞い」や「恐るべき段階におよぶ」不正行為を厳しく批判し、世界の永遠平和を実現するための手立てを模索する。そのキーワードとなるのが世界市民の法と権利である。「永遠平和は空虚な理念ではなく、われわれに課せられた使命である」と語るその言葉は力強く、まさに時代を越えて読み継がれる平和論であるが、ここでは当時の世界観を検討し、「市民」の範疇の外に位置づけられた人びとに目を向けることで、世界市民像の限界に着目したい。

具体的には、まず当時の世界観が世界史観でもあったという歴史哲学の要点を押さえることになる。人間の道徳的素質が人類の歴史の中で発展し、未開状態から市民状態（啓蒙化された状態）、そして世界市民状態へ連なるという発想は、世界各地に暮らす人びとの多様性を、人類の歴史の過去と現在の共時性としてとらえることになった。また、キリスト教的人間観に訣別して、人類の多様性を探究しようとする姿勢は、今日呼ぶところの形質人類学的な考察を生み出し、「人種」の区分も試みられた。他方、「啓蒙のドイツ」の内側においては、諸邦分立主義をとりながらも、これから到来するであろう市民社会のあるべき姿が議論され、ユダヤ教徒や女性の「市民的改善」が話題になった。

歴史哲学や人間学／人類学における世界（史）観と、啓蒙思想に導かれる市民社会の原理を交差させること。本報告は、啓蒙期のコスモポリタニズムを考えるにあたって、この視座の意義を提示していきたい。

第3報告

市民フランクリンのコスモポリタニズム：共和主義、パトリ、世界市民

金井 光太朗（東京外国語大学）

ベンジャミン・フランクリンはブリテン世界を代表するコスモポリタンの一であった。電気の研究論文はフランスでまず高く評価され、彼が提案する風による雷の実験もフランス人が最初の実証した。ロンドンとパリで合計30年近く暮らし、訪英したデンマーク国王から晩餐招待の光栄に浴し、パリ駐在の間にかのヴォルテールと大西洋の両側における偉大な哲人同士が「感動の出会い」を果たしたのであった。彼がアメリカで死んだとき、フランスでは貴族の称号廃止を審議する憲法制定国民議会の最中にミラボー伯がその死を告げ、「稲妻と暴君をともに屈服させ」た哲学者に議会は3日間の国民的服喪を公布した。そうした彼のコスモポリタナ活躍は、どのような意識に支えられていたのであろうか。そのキャリアをたどりながら探ってゆきたい。

印刷職人上がりでフランクリンは、規律をもって勤勉に働き財をなす人生を送った。そのことから自己の利益追求に邁進していた人物と思われがちである。ウェーバーがブルジョアの典型を見た人物である。しかし、彼の本当の人生は、なによりも社会（パトリ）の公益増進に関心を持ち、それに尽力する市民としてのものなのであった。ビジネスに成功しているミドリング・ソートの時代から「ジャントー」の集まりで公益に資する活動に熱心に取り組んだ。事業から引退し自他共にジェントルマンと認められてからは、フィラデルフィア市およびペンシルヴェニア植民地の立法者として公益の実現に尽力した。ロンドン滞在中に帝国の危機を救うべく英米融和を最後まで諦めなかったのも、大西洋兩岸の相互利益を失ってはならないからであった。最後の段階でパトリとしてイギリス帝国を選ぶか、アメリカを選ぶかの決断も、どちらの指導者が公共の利益に責任を感じているかの判断によったのである。彼は共和主義を強く信奉し、パトリの公益を優先して考える市民としての意識を持っていたといえよう。

フランクリンのコスモポリタニズムは市民意識の当然の延長であったと考えられる。社会の公益に貢献するのが市民だとすれば、18世紀にパトリたる国家が公益の中心的な場であるのは当然としても、商業の広がりとともに国境を越えた人類の公益が自然に広がっており、市民はそこでも貢献するのであった。秩序を維持し公益を増進するには、人間が道徳性を高め合理的知性を磨く必要がある。市民は無私で有徳な存在であって始めてパトリの国政に参与することが認められる。市民がそのような存在であるならば、国益としての公益に限らず広く人類の利益も構想できるであろう。そのままでも同時に世界市民たることになる。フランクリンにとって最終的には、パトリのアメリカがそうした市民性を最もよく発揮できる場だったとしても、彼は世界のどこにいてもそうした市民性を実践してきたのであった。つまり、18世紀の典型的な世界市民、コスモポリタンだったのである。

総評

勝田 俊輔（東京大学）

近年、英語圏ではコスモポリタニズム研究が盛んとなっているが、日本ではまだ本格的な研究は進展していない。本シンポジウムは、この意味で歴史学のみならず人文諸科学にとっても少なからぬ意味を持つと考えられる。

ただし、一口にコスモポリタニズム／コスモポリタンと言っても、その内容は多様である。18世紀に限ってみても、世期始めのサン・ピエールや世期末のカントのように世界政府を構想する立場もあれば、モンテスキューやヴァッテルのように貿易を通じた諸国家の交流・結合を理想視する考えもあった。ゴールドスミス作品のようにフィクションの世界での人物像として世界市民が提示される場合もあり、当時の文人の書簡では一種の戯れ言としてこの語がしばしば用いられた。またフランクリンのように、教養人ではないながらも大西洋世界で人類の公益を迫及した人間もコスモポリタンな存在として見逃せない。さらにアディソンのスケッチにあるように、諸文化の混交状態それ自体に価値を与える立場もあった。

こうしたコスモポリタニズムの多面性は、18世紀の西洋世界の多様性を反映している。すなわち、主権国家体制が既成事実化し、その上で諸国家間の戦争が頻発したことが、国家を超えた連帯への希求を強めた。同じ時期に大西洋世界が本格的に成立して南北アメリカ大陸との関係も緊密化しており、このことはコスモポリタニズムの想定する人間観に大きな影響を与えていた。

コメントとしては、18世紀のコスモポリタニズムと19世紀のインターナショナリズムとの異同を確認した上で、以下の諸問題を提起したい。第一に、ブリテン本国における積極的な世界市民主義の欠如、第二にフランクリンに代表されるコスモポリタンな実践の重要性、第三にコスモポリタニズムの言説・理念の戦略性および被拘束性の問題である。

第2日 6月25日

自由論題報告(7)

会場：立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館3階 多目的ホール

1707年イングランド・スコットランド合同（英蘇合同）と 18世紀スコットランド政治

松園 伸（早稲田大学）

1707年の英蘇合同は「一つの国家、二つの国定教会、二つの法制度」を基本原則として、二つの国家主権を一本化するという壮大な試みであり、19世紀のホイッグ史家、憲法（政）史の格好のテーマであった。名誉革命以降の「第二次英仏百年戦争」の最中、過去にしばしば親仏的傾向を示してきたスコットランドをイングランドが取り込んだことで、アイルランドの植民地化と相まってブリテンのフランスに対する地政学的な優位性は高まり、この国家連合の試みは、18、19世紀における英帝国の形成にも少なからざる影響を与えている。

しかし、他方スコットランド内にある反合同派によれば英蘇合同は、ダリエン植民計画の破綻以降国家経済の崩壊に瀕していたスコットランドにとって、経済的な救済を目的とした「イングランドの金（きん）で購われた合同」(The Union Bought for English Gold) に他ならず、国家の恥辱以外の何物でもなかったのである。18世紀後半～19世紀のスコットランドの経済的繁栄は、一時的に合同反対への熱意を冷まさせたが、合同反対の論理は Scottish identity, Scots nationalism の重要な要素であり、それは18世紀前半におけるスコットランド・ジャコバイト、ジャコバイティズムの政治行動や思想に表れているし、19世紀以降の散文、詩文、音楽、絵画等にも継承されているのである。2007年の英蘇合同300周年において、多くのスコットランド知識人はこれを単なる「記念祝賀行事」とせず、むしろこの合同の歴史的意義の根本的再検討に向かわせた。そしてそれは2014年のスコットランド独立投票への伏線ともなったと考えられる。

しかるにわが国の18世紀イギリス史研究において、スコットランド啓蒙研究などの非常に隆盛に比して、反英蘇合同の思想と行動、ジャコバイティズムなどへの関心は驚くほど低い。報告者は、これまで英蘇合同を研究テーマとしてきたが、最近私が発見した新史料の紹介などを絡めて18世紀スコットランド政治を考察していきたい。

自由論題報告 (8)

会場：立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館3階 多目的ホール

18世紀フランス市民劇と「憐みの政治」

—ルイ＝セバスチアン・メルシエ『貧乏人』における貧困の表象—

貝原 伴寛（東京大学大学院）

ディドロをはじめとする18世紀フランスの市民劇の推進者のうち、演劇にとりわけ大きな政治的役割を期待したのが、ルイ＝セバスチアン・メルシエ（1740–1814）である。『演劇論』において、同情（compassion）と憐み（pitié）によって諸個人を相互に結び付けることを演劇の目的としたメルシエは、下層民を含む多様な境遇の人間への憐みを誘う作品を数多く著し、観客に善行を勧めることで、感性の改革を通じた社会変革を企てた。しかしメルシエの演劇改革と同時代の政治・社会との関係は、これまでの研究では本格的に取り上げられてこなかった。メルシエの演劇はもっぱらロマン主義との関係を念頭に置いた文学史的関心のもとで論じられ、他方で18世紀社会をめぐる歴史研究は、戯曲ではなく『タブロー・ド・パリ』等のルポルタージュ的作品を参照してきた。

しかし、感情主義（sentimentalism）をめぐる近年の研究を踏まえれば、メルシエ演劇の政治性は看過すべきではない。アンヌ・ヴァンサン＝ビュフォやウィリアム・レディらによれば、18世紀のフランスでは「自然な感情」を徳性の源と見なすシャフツベリ以来の感情主義が、小説など様々な回路を通じて広く伝播し、公の場での落涙という形で実践された。さらにリュック・ボルタンスキによれば、この感情主義を背景に、具体的な苦しみの光景をメディアによって報道し、政治的行動を呼びかける「憐みの政治」が出現したという。しかしその実践例としては、ヴォルテールのカラス擁護など、印刷物を通じた運動が挙げられるにとどまり、18世紀の主要な視聴覚メディアであり、ヴァンサン＝ビュフォが特権的な落涙の場とした演劇についても、ボルタンスキの議論が妥当するかは未解明である。メルシエの演劇に注目することで、「憐みの政治」論の演劇への妥当性を検証することが可能になる。

本報告は上記の関心のもと、メルシエの市民劇に注目する。具体的には『貧乏人』（*L'Indigent*, 1772年初版）を取り上げ、同時代の他の戯曲と比較しながら、その貧困表象の特徴を明らかにする。その上で、同作をボルタンスキの議論に照らし合わせて、メルシエの市民劇が「憐みの政治」の手段と成り得たのかを考え、感情主義と政治的实践との関係を考察する一助としたい。

自由論題報告 (9)

会場：立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館 1階 第一第二会議室

クニッゲとその娘フィリッピーネ —啓蒙後期の父による女子教育の一例—

吉村 暁子 (立教大学大学院)

18世紀後期啓蒙時代の著述家アドルフ・フライヘル・クニッゲ (Adolph Freiherr Knigge, 1752-96) は、その主著『人間交際術』 (*Über den Umgang mit Menschen* 1788) において、新興の市民階層を含む「人間のすべての階層との交際方法」を語った。今日のドイツでは「クニッゲ」といえばハウツー本あるいは各種入門書の代名詞として機能するが、これまで文学史的にはあまり評価されてこなかった。1960年代以降、M・リュヒナーやG・ユードィング、K.-H.・ゲッテルトラをはじめとする論者たちによる議論の活発化や全集の刊行を経て、とくに90年代以降には、市民階級の勃興という社会文化史的な文脈や、演劇や音楽といった幅広い分野での活動が見直されてきた。日本では、明治後期に森鷗外が『人間交際術』を抄訳したことが小堀に発見されて以来、鷗外研究およびヨーロッパの箴言書または処世術書の系譜の中で紹介された。90年代以降、中・笠原によって『人間交際術』の本格的な翻訳がなされ、笠原の近著においては、啓蒙後期時代を「社交の世紀」と見て、〈交際〉をめぐる当時の言説の中でクニッゲの社交論を捉えなおそうとする試みがなされている。しかし、クニッゲのその他の著作についてはまだ研究が十分になされているとはいえない。そこで本発表はクニッゲの数多くの著作の中でも、教育論に注目する。

「子ども」の教育にも関心が向けられ始めたこの時代、クニッゲもまた教育に強い関心を抱いた。その教育観は『教育に関する書簡』をはじめ、彼の小説などに見取ることができるが、クニッゲの教育的関心が実際に向けられたのが、一人娘のフィリッピーネである。啓蒙の思想が浸透した18世紀後半、男女間の自然の性差への注目、とりわけルソーの思想の広がり、子どもを庇護し養育することへの親の道徳的な義務と責任感を呼び起こしつつあった。ルソーの『告白』のドイツ語訳に取り組み、『エミール』を読むことを推奨するクニッゲもまた、娘を手元に置き、家庭教師を付けることなく自ら教育を行った。またフィリッピーネが両親の元を離れていた時期には、彼女にさまざまな注意事項や指示を手紙で伝えている。フィリッピーネからの返信は失われているが、30通を超えるそれらの手紙は、愛情や助言、気遣いに溢れているかと思えば、厳しい叱責も随所に表れる。そこには伝統的な貴族の子女への教育と啓蒙主義的な教養ある女性像、そしてルソーの影響を受けたクニッゲ自身の教育観とが入り混じって見られることを、B・ニューベルは指摘している。この書簡を中心に、父による子どもの教育、とくに若い女性に向けられた教育の一例として、クニッゲがフィリッピーネをいかなる意図をもって教育を施したのかを明らかにしたい。啓蒙後期の進歩的人間観をもとにした教育が、理想と現実とのせめぎあいの中で、父親から娘へいかに実践されたのかを確認することで、クニッゲにおける教育論をとらえる出発点としたい。

世界の複数性

コーディネーター：坂本 貴志（立教大学）

趣旨説明

宇宙世界像の中で人間がどのように位置づけられるかという問題は、20世紀になるまでに忘れられるようになったテーマであるように思われる。地球上における我々の生活と社会の様々な問題と関心からは、地球外の現象と歴史は、専門家を除けば、知的関心の自然科学領域における拡がりや誇示のための好事家的対象でしかなくなったようにさえ思われる。一方、その専門家集団の関心の中心は、宇宙の歴史を説明するための大まかなスケールを手にした現在、系外惑星の発見とそこにおける生命現象の痕跡を探すことに移行したとも言われる。地球外の知的生命の存在は、AIと並んで、人間とその知性の意味をより普遍的なレベルで考えるための材料となるであろうが、それゆえにこそ、宇宙世界の中の人間像の探究というテーマをあらためて考える意義は今日において決して小さくはない、と考えられる。

他の天体の住民のイメージは、遅くともピュタゴラス派以来考察されてきたが、このイメージが人間の自己理解にあたって、決定的な指標として働くようになったのは、ハンス・ブルーメンベルクが説明したように、ルネサンスの終わり、バロックの始まりの頃であった。その議論の核心は、地球中心のプトレマイオスの宇宙像を抱くか、太陽中心のコペルニクスの宇宙像を抱くか、という世界像をめぐる単にであったのではなく、むしろ他の天体の住民を思い描くこと、すなわち世界の複数性を前提とするか否かが、キリスト者にとっての躓きの石だった（ブルーメンベルク『コペルニクスの宇宙の生成』1975）。他の天体の住民の存在をそもそも認めるか、認めるとするならば、それは啓示宗教といかなる関係をもつのか、という問いは、バロックから啓蒙期にかけてのヨーロッパの知性にとって、避けて通ることのできないテーマであったのであり、またこれを視野に入れてのみ、首尾一貫した世界観をそれぞれの立場で構築することができたと考えられる。18世紀の代表的知性は、他の天体の住民を、否定するにしろ肯定するにしろ、視野の外にはおこななかった。そうした問題圏は、むしろ自明すぎる根本的な前提を抱えていたために、19世紀後半以後の各学問分野の確立以降20世紀に到るまでに、その決定的な意義も含めて、忘れ去られるに到ったと考えられる。

18世紀の複数世界論は、神学との整合性を見る上で、さまざまなレパートリーの出現と

それぞれの理論における完成を一応は見たように思われる。これを概観するにあたってはマイケル・J・クロウ、長尾伸一氏の仕事が参考になる。この度の共通論題では、18世紀にいたるまでの流れを考慮しつつ、英語圏、フランス語圏、ドイツ語圏、中国、そして日本というそれぞれの視座から、複数世界論が思想と文化、文学におよぼしたインパクトの様相をさまざまに検討してみたい。その目的は、宇宙論を背景にした文化と思想の状況を、それがもったより普遍的な相において再構成した上で、その意義を考究し、合わせて、現代における人間と自然宇宙との関係を考えていく上でのひとつの示唆を得ることである。

(坂本 貴志)

第1報告

複数世界論の普遍性、多様性と18世紀における機能

長尾 伸一（名古屋大学）

18世紀ヨーロッパの表象世界の中に多くの天文学的な複数世界論が登場するのは、探検記やユートピア物語が書かれた時代として不思議ではないが、科学的文献の中にもそれが広く見られる理由は自明ではない。その一つの解釈は、ピエール・デュエムの中世哲学—近代科学連続説から得られるかもしれない。古代の伝統を受け継ぎながら、有神論的形而上学として展開したイスラーム神学、スコラ哲学の思索が天文学的複数性論を誕生させ、それが18世紀の世界の複数性論へと展開しつつ、17世紀以後の科学的探究の一つの形而上学的動機となったと説明できるからである。

また「世界の複数性」は、一見したほど異様で、日常経験からかけ離れた観念ではない。世界に関する複数性論（プリューラリズム）を、「日常世界と平行し、これに対応した充実度をもつ不可知の領域が存在するとする、全体としての世界の表現の仕方」というように広く定義して、認識主体としての個人の経験可能領域に適用すれば、複数性論が「自分が今まで知らない、今後も決して知ることができない客観的世界や、他人の内面世界が存在する」という、日常世界の経験の枠組みに適合的な思考だと考えることもできるだろう。

このような意味での複数世界論は、多様な形態を持つ。初期近代のヨーロッパについても、結果的に近代科学史の主流となった原子論的世界観ばかりでなく、本来の形而上学的な多世界論、ミクロの複数世界論、「ピュタゴラス主義」と呼ぶしかないルネサンスの混合物など、様々な形態があり、それらが18世紀的な世界への眼差しの背後に存在していた。

では複数世界論が18世紀的で果たした機能はどこにあったのか。それは以下のように展望できるかもしれない。この世紀の複数世界論の中心となった天文学的複数世界論は、「社会的動物」としての経験的存在の面に加え、論理と数理という、神を含む全ての知性に普遍的に妥当する手段で、複数世界に多数存在する純粋な知的生命の一つとして人間を見ることを促した。しかし人間存在に本源的なこの二つのソーシャリティからは、文明とその権力機構は導かれない。むしろその観念は、同時代の知の科学化による、公的言説空間における「現実」の生成と結びついて、知的生命としての普遍的なあり方（自然的秩序）を内包する日常経験の世界（生活世界）と、王や神や想像上の富である貨幣が支える文明（システム）との対立の視点をもたらし、この世紀の思想家たちに、日常世界の視線に基づく文明の再構築を企てさせたのである。とすれば、19世紀末からの複数世界の忘却と世界の単一化、既知化は、狭義の「近代」の成立の一面であり、「啓蒙」の既成化に伴い、それを支えている文明のメカニズムが現代人の桎梏となっているともいえるだろう。

第2報告

18世紀フランスにおける表象理論の刷新と複数性

玉田 敦子 (中部大学)

『ポール・ロワイヤル論理学』が示しているように、17世紀には、「言語」と言語が指し示す対象である「物」とが一对一で対応する関係が求められていた。「記号は二つの概念を包括する。表象するものの概念と表象されるものの概念を包括しているのである。記号の性質は表象されるものの概念によって、表象するものの概念を生じさせることである」。『ポール・ロワイヤル論理学』はこのように述べて、「思想」と「表現」が一对一で対応する「表象／再現 (représentation)」を、世界の普遍的な原理と見なした。17世紀の古典主義文学理論が理想とした「明晰な文体」もまた、基本的にこの「普遍言語」の概念、すなわち「思想」と「表現」が一对一で対応することを目指す、ポール・ロワイヤル的な表象の原理にもとづいていた。

ミッシェル・フーコーは『言葉と物』においてアダム・スミスを参照しながら、この古典主義的な表象理論が18世紀においても存続したと述べているが、実際には啓蒙の世紀の言語はかつての古典主義的な表象システムの枠には収まりきれないものとなっていった。18世紀において表象理論はアリストテレスの単一性哲学にもとづいた単一世界論と袂を分かち、自己中心性に立脚した視点から離れて、ライブニッツ哲学が体現する複眼性を示すようになる。世紀前半に書かれた「美学論」を紐解けば、萌芽期にあった「美学」が単一性の原理から複数性への志向に移行していくことは明らかである。例えばジャン＝ピエール・ドゥ・クルーザは、『美の理論』(1715)において、美とはすなわち神による完成であり、必然的に「一様性 (uniformité)」をその特性とすると論じるが、その一方で「一様性」のもたらす「倦怠 (ennui)」を避ける手段として「多様性＝変化に富むこと (variété)」を求めていた。シャルル・パトゥの芸術論『同一の原理に還元される諸芸術』(1746)においても同様に、「一様性」「多様性」の共存が芸術作品における美の条件として論じられている。ところが世紀後半になり、「美学」が新たな学問領域として確立されるようになると、「一様性」に対する信奉は大きく後退する。たとえば、『趣味試論』(1757)において、モンテスキューは「一様性」を完全に否定し、「多様性」のみを美の原理としている。

このように17世紀フランスの表象理論がアリストテレス的な単一性哲学にもとづくものであったのに対して、18世紀フランスにおいては、言語の中にライブニッツが言及するようなミクロな複数性を内包させることによって文体に速度が求められるようになった。本報告は、こうした表象理論の変化を糸口として、18世紀フランスにおけるアリストテレス的かつ古典主義的な単一性の原理からの脱却と複数性の哲学に立脚した新たな美的価値の成立について明らかにする。

第3 報告

世界の複数性と永遠の哲学 —ゴットシェートと山片蟠桃—

坂本 貴志 (立教大学)

ドイツ語圏における複数世界論の紹介は、啓蒙主義の代表者ヨーハン・クリストフ・ゴットシェート (1700-1766) の功績によるところが大きい。彼はフォントネルをドイツ語訳し (1726)、また大学で教科書として使われることを意図して出版し 30 年間で 7 版を教えるまでにポピュラーとなった書、『全世界知の最初の基礎 *Erste Gründe der gesammten Weltweisheit*』(初版 1733) においても複数世界論を、紹介すべき最も重要な知として位置づけている。ゴットシェートの宇宙論的人文学に特徴的なのは、他の天体の住民と合同で行う、宇宙空間における輪廻転生による道徳的完成の夢であり、これはカント、ヘルダー、レッシング、クライストなどと共有されている。一方で、複数世界論を展開するゴットシェートに顕著であるのは、永遠の哲学、あるいは古代神学と呼ばれる知的運動の並存である。永遠の哲学とは、根源にあった啓示と、その記憶の様々な系譜、そして系譜の学術的な統合研究を通して、啓示の真理へと復帰することを目指す。神的なるものにかかわる全ての知は、同一根源からの派生と劣化なのであり、それら断片の配置と再構成によって神性の完全なる認識へと導かれる、とする知的態度である。ゾロアスター、ピュタゴラス、ヘルメス・トギスメギストス、(新) プラトン哲学、ユダヤ神秘主義などはすべて根源の啓示から派生しており、それらの知を正しく再構成するならば、啓示の知に人類は再び辿り着けるのであり、この永遠の哲学が複数世界を視野に入れて、その展開の領域を拡張されてある点が、ゴットシェートには特徴的である。

世界の複数性と永遠の哲学とをリンクさせる視座をゴットシェートに提示したのは、イギリスのニュートン主義者、ウィリアム・ウイストン (1667-1703) であり、その『地球についての新理論 *A new theory of the earth*』(1696) に描かれる普遍史が、ゴットシェートがその思想を構築するにあたって媒介の役割を果たしている。同じウイストンの『太陽系図 *A scheme of the Solar system with the orbits of the planets and comets belonging thereto*』(1720) は、山片蟠桃の『夢ノ代』(1820) における『ウイストン太陽明界図』へと採用されてあるが、蟠桃はウイストンの普遍史にも同意するわけではなく、無鬼論、つまりは魂の不死性を否定する立場をとる。

ウイストンという同じ情報源をもちつつも、必ずしも同一の哲学的宗教観へと帰着するわけではないことが、ゴットシェートと山片蟠桃の複数世界論をともに参照することで了解される。むしろ永遠の哲学という、ヨーロッパ世界に固有の、単元発生的な世界理解の方法が、複数世界論と結びつくところに、18 世紀ヨーロッパの思想状況に典型的なひとつの特徴があり、これは、ヨーロッパ中心主義的な世界了解の方法として、それ以後の学問のありようにも決定的に影響してくると考えられるのである。

第4報告

18世紀中国における天文学的複数世界論の不在 —朝鮮知識人に対する応答の記録を手掛かりに—

林 文孝 (立教大学)

地球以外の天体にも知的生命が存在していて、人間世界とは異なる独自の世界が存立していると説く天文学的複数世界論は、18世紀ヨーロッパの科学的言説において隆盛を迎えたのみならず、ほぼ時を同じくして東アジアにも見出されることが従来から指摘されてきた。そして、それらは多かれ少なかれ、ヨーロッパ科学の知見から影響を受けてのものであった。たとえば日本の山片蟠桃(1748-1821)の『夢ノ代』(1802-1820)の場合は、蘭学者・志筑忠雄の『暦象新書』の所説を利用している。また、朝鮮の洪大容(1731-1783)が『豎山問答』に記した無限宇宙論については、イエズス会士による漢訳天文学書を通じてティコ・ブラーエの宇宙体系を参考にしていることが指摘されている(洪に先立って地転説を唱えた金錫文『易学二十四図解』(1697)についても同様)。

しかし、こうした既知の東アジアの状況には、大きな空白部分が存在することが気づかれよう。清朝統治下の中国である。イエズス会を通じて得られたヨーロッパ科学の知見が中国思想に与えた影響の深度や様態については、さまざまな評価があり得るが、洪大容に見られるような無限宇宙論、天文学的複数世界論にまで展開された事例は、これまでのところ報告されていない。もとより、金錫文や洪大容の所説が持ち得た社会的影響力も限定的ではあろうが、それでも、洪の友人であり朝鮮実学派を代表する学者・朴趾源(1737-1805)といった他の有力思想家への影響は顕著に認められる。それと同等な意味での複数世界論の展開は、中国の場合はなかったと言えそうである。

だとすれば、なぜそれは中国にはなかったのだろうか？ 本報告では、その問いに答えるための一つの手がかりとして、朴趾源の著作『熱河日記』の記述に注目し、微視的な分析を試みる。同書は朴が1780年、清の乾隆帝の70歳祝賀のために派遣された朝鮮使節に随行しての旅行記であり、そのうち「太学留館録」と「鵝汀筆談」において、朴は金錫文と洪大容の所説を受けての月世界存在説を清朝の人々を相手に語っている。朴としては満を持して持ち出した話題であったが、奇豊額(満洲人)、王民皞、郝成といった諸人が示した反応は、朴の期待通りとは行きかねたようである。彼らが筆談で応じた内容は、ときに非科学的文脈へと横滑りし、ときに話題そのものが転換して中国側の興味で話が展開しつつ、清朝への忌諱とみられる配慮をも垣間見せる。そのすれ違いぶりから、中国人自身の自発的著作には表れにくい思想構造の露頭を見て取ることはできないだろうか。こうした期待のもと、筆談・発言の記録を分析しながら中国側諸人の発想を主導する要素を抽出し、ときにそれらの要素を巨視的な文脈に置き直すことなどを試みた上で、18世紀中国における天文学的複数世界論の不在を条件付けていたものは何か、考えてみたい。

ひるがえって問うべきは、天文学的な議論以外にもいっさいの複数世界論の可能性が当

時の中国にはなかったのかどうか、であろう。中国思想、なかでも儒教思想の元来の世界認識は、世界の単一性を前提としていたといえる。しかし、18世紀を前後する時期の中国の情勢を念頭に置けば、世界の単一性の想定が維持し続けられたとは考えにくいところがある。中国において世界の複数性という観念があり得たとすれば、それはどのような文脈においてであったか。こうした問題にも説き及びたい。

(林 文孝)

第5報告

日本における異界・他界表現と複数世界論 —断続・杜絶・再生—

鈴木 彰（立教大学）

日本文学において、人ならざるもの（＝異類）や、人の住むこの現世とは異なる世界（＝異界）を描き込んだ作品は数多く存在する。異類や異界の姿かたちは、その時々の人々が抱いてきた人間観や世界観、自己認識などとの対比や相剋のなかで創出されるものにほかならない。そうした意味では、変化すること、生まれ変わることの本質のひとつとして備えているといつてよいだろう。

18世紀末、日本に複数世界に関する議論が伝わることで、それまでの異界・他界観ほどのように作用を受けることとなるのであろうか。また、のちにそれはどのように再編され、変容していったのであろうか。その様相は、むろん単線的に把握できるものではなく、多角的な分析を必要としよう。本報告では、文芸にかかわる想像力と表現史の問題として、18世紀を含めたやや長い時間枠を設定し、上記の問いと向き合い、ひとつの視座を提供することとしたい。

異界・他界を描く多種多様な作品のなかには、天空の上（地球の外）に存在する世界の住人との接触を描く物語も含まれている。文学史・表現史上、『竹取物語』の存在感は無視することはできない。また、お伽草子とよばれる短編の物語群のなかには、異界訪問という要素を備えたものが少なからず存在しており、その中には、月・星の世界を訪れるという展開をもつ物語も見いだせる（『天稚彦物語』など）。まずは、それらを通して、18世紀に至る日本の文学史における、異界・他界表現の様相とそれに付随する認識のありよう、そしてその消長について概観することとしたい。

こうした分析と並行して、複数世界をめぐる議論にかかわった国学者・儒者たちそれぞれの主張に耳を傾ける必要があるのはいうまでもない。本報告では、彼らが古典文学の享受者でもあったことに留意しながら、随時その議論に目を向けてみたい。山片蟠桃を例にしていえば、その著作『夢ノ代』には、「引用書目」に示されたような数多くの物語・神話・説話の類が故事として利用されているのであった。

また、地動説や天体論、世界形成論に関する議論が重ねられ、かつ社会体制が移行するという過程を経たのちに現れてくる異界・他界観を反映した著作物の具体例として、19世紀の末に出版された児童・少年向けの読み物の内容に注目してみたい。それは、複数世界をめぐる認識が、一部の思想家のみならず、広く日本社会へと展開していく重要な回路のひとつであったと考えられるからである。

以上のように、18世紀以前の異界・他界観のありようと、それが複数世界をめぐる議論と衝突し、再生していく様相にわずかな光を当てることで、議論のための小さな糸口を提供できればと考えている。

2017年5月 発行

日本18世紀学会

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院経済学研究科 日本18世紀学会事務局

e-mail: jsecs.nagoya.uni@gmail.com

tel: 052-789-2380

fax: 052-789-4924

<http://www.gakkai.ac/jsecs/>